

# 所報

第52号 2005年3月

発行者 沖縄県立総合教育センター

所長 前泊 豊光

〒904-2174 沖縄県沖縄市字与儀587番地

電話 098-933-7555

FAX 098-933-3233



## 小学校英語活動及びイマージョン教育研修スタート！

= 国際化に対応できる人材育成を目指して =

総合教育センターの新規長期研修として「小学校英語活動及びイマージョン教育研修」が新年度から本格的に開始されます。平成14年3月策定の「県立高等学校編成整備計画」で、国際分野の高校として「沖縄インターナショナル中等教育学校（仮称）」の設置計画が明記され、平成19年度以降の計画として中部の既存高等学校を再編成することでイマージョン教育の実施を検討していることなどが背景にあります。

イマージョン教育を実施するにあたり、英語科はもとより数学科、理科、社会科などの各教科を英語を通して授業展開できる教員が少ないのが実状です。「小学校英語活動及びイマージョン教育研修」では、中学校・高等学校におけるイマージョン教育として、小学校では部分イマージョン教育を実践できる教

員養成を主なねらいとしています。

以下、各研修の主な内容を紹介いたします。

### 【小学校英語活動研修：小学校教諭対象、6か月間、前期6名+後期6名予定】

英語運用能力向上の研修

英語活動等の指導方法の研修

IT活用の指導方法の研修

小学校英語における部分イマージョン教育の指導研修

### 【イマージョン教育研修：中学校・高校教諭等対象、1年間、10名予定】

英語運用能力向上及びイマージョン教育方法の研修

教材・教具開発の研修

IT活用の指導方法の研修

県内外国人学校実地研修

### 「イマージョン教育（Immersion Education）」とは・・・・・・・・

外国語習得の一教授法で、どっぷりと外国語に浸かりながら展開される指導法。例えば英語を用いて数学の授業を実施すること等。1960年代にカナダで開発され、アメリカで発展した指導法だが、日本では群馬県立中央中等学校やスーパー・イングリッシュ・ランゲージハイスクールなどで、かなり取り入れられている。

### \*\*\*\*\*もくじ\*\*\*\*\*

(ページ)

小学校英語活動及びイマージョン教育研修スタート！	- 1 -
通常学級にいる子どもの障害に早い段階での気づきを！！	- 2 -
特別支援教育講座開設	- 3 -
報告「不登校を考えるシンポジウム」	- 3 -
学校現場への提言、盛りだくさん（総合教育センター研究発表会）	- 4 -
「学校教育支援室」の改善に向けて	- 5 -
平成16年度より新システム導入（産業教育課）	- 5 -
未来のノーベル賞受賞者を！！（おもしろ科学教室）	- 6 -
やんばるの森から	- 7 -
確かな学力の定着のためのITの効果的な活用	- 8 -

## 通常学級に在籍する子どもの障害に早い段階での気づきを！！

- 「特別支援教育講演会」のアンケート結果から -



去る2月21日、「軽度発達障害の理解と支援についてー保健医療の立場からー」と題して当総合教育センター主催「特別支援教育講演会」が開催されました。遠く宮古、八重山からの参加もあり、幼稚園、小・中・高校、盲・聾・養護学校のそれぞれの教諭、教育事務所、各市町村教育委員会から、合計343名の参加がありました。

山口県立大学看護学部林隆教授（講師）による軽度発達障害（LD、ADHD、高機能自閉症等）の認知特性等についての説明は、通常学級に在籍する軽度発達障害の子どもたちへの理解を深めることができ、具体的支援についての話は、とても参考になりました。参加者からは「学校全員に聞かせたい」等の感想が寄せられました。

以下に参加者へのアンケート結果の一部を紹介しますが、数字はすべて実回答数を表しています。なお、回答数は207でした。

特別な支援が必要な児童生徒のうち、軽度発達障害と思われる子どもがいるか	回答数		
	いる	いない	無回答
	143	40	24

「特殊教育から特別支援教育」への理解の程度	回答数	
	講演前	講演後
a 新しい制度の内容をほぼ理解している	26	100
b 大まかな内容は理解している	110	95
c 聞いたことはあるが、内容は余り知らない	65	8
d 聞いたこともなくどのように変わっていくか知らない	5	4

軽度発達障害の子どもへの理解の程度	回答数	
	講演前	講演後
a 知っている	69	115
b 概要程度なら知っている	122	85
c どんな状態の子どもなのか余り知らない	16	3
d 聞いたこともなくどんな状態の子どもなのか予想もつかない	0	4

特殊教育から特別支援教育への理解の程度で、「内容をほぼ理解している」「大まかな内容を理解している」を合わせると、講演後は26%も増え、「軽度発達障害の子ども」についての理解の程度では、「知っている」が23%も増えている。医療の専門的な面からの話を聞くことにより、軽度発達障害児童生徒への理解が一段と深まり、今後、日々の教育実践に大いに役立てていくことが期待されます。

当総合教育センター特殊教育課で行っている障害児教育相談での「軽度発達障害」についての相談件数は、16年12月末で152件中55件あり、知的障害の相談件数を抜いて、一番多くなっています。しかも、ほとんど小・中・高校に在籍する児童生徒の保護者や担任からの相談です。

一人一人の教育的ニーズを把握して、その持てる力を高める特別支援教育の推進のためには、医療、福祉等との連携、情報の共有が大切になりますが、今回の「特別支援教育講演会」がその契機の一つになることを期待します。

# 特別支援教育講座開設

H17.7.21

特殊教育課では、特殊教育から特別支援教育への時代の変化に対応するため、H17年度短期研修で、特別支援教育講座を新たに立ち上げます。  
メニューは、盲教育、聾教育、知的障害教育、肢体不自由教育、病弱教育の概略と新たに特別支援教育の対象となった軽度発達障害教育についての基礎講座となります。  
今のところ、対象研修定員は以下の表のように予定しています。

特殊教育から

特別支援教育へ

	国頭	中頭	那覇	島尻	宮古	八重山	計		計
小学校	7	18	8	10	1	1	45	高校	15
中学校	2	7	4	5	1	1	20	特殊	30



## 報告「不登校を考えるシンポジウム」

### 教育相談研究室

平成 16 年 11 月 13 日、当センターで沖縄県適応指導教室連絡協議会主催の不登校を考えるシンポジウム「互いに支え合う関係をめざして」が開催されました。二百余名の参加者があり、好評のうちに終わりました。

コーディネーターには「てるしの」(沖縄県適応指導教室)のスーパーバイザーで琉球大学の平田幹夫先生が就き、照屋友理さん(体験者 現中学校講師)、喜久山由子さん(保護者)、中山美都子さん(適応指導教室担当者)、知念ひろみさん(養護教諭)、稲葉律子さん(カウンセラー)がそれぞれの立場から提言を述べました。

照屋さんは「不登校で良かった。自分にとって無くてはならない大切な経験であり、保護者の皆さんも長い目で見守って下さい」と、喜久山さんは3人の子どもの12年に及ぶ不登校を通して「長かったが、辛いことばかりでなく、楽しいことも沢山ありました。絆も深まり何でも話せる親子になりました。子供たちに感謝しています」と、中山さんは「子

供は自分が大切にされていると実感すると、少し強くなれます。適応指導教室は、そのお手伝い・支援であって、生きていくのは本人や家族です」と、稲葉さんは「不登校の子の目標を単純に学校復帰におくのではなく、学校に行かないことを通して、それぞれの内的課題に取り組んでいるのだと考えて、支援をしていきたい」と、知念さんは「保健室は子供のサインが多く出される場、“治そうとせず、わかろうとせよ”の姿勢でサインをキャッチしてあげたい」等との提言でした。不登校経験者によるミニコンサートもあり、「不登校であった子供がそれぞれの道をしっかり歩いている。自分の子供が今不登校だといって悪くとらえることはやめよう。心配する必要はない」などの感想が聞かれました。

最後に平田先生が「幼稚園児からの支援の必要性、笑いのある家庭や学校や適応指導教室作り、将来の社会復帰を目指しみんなで支えていくことの大切さ、最近では高校生の不登校が課題になっている」とまとめられました。

# 学校現場への提言、盛りだくさん！！

- 平成16年度総合教育センター研究発表会！ -

平成 17 年 2 月 14 日「平成 16 年度沖縄県立総合教育センター研究発表会」が開催されました。

この発表会は、当センターが本県教育の今日的課題の解決に向け、所員の総力を結集して進めている調査研究事業の一環として開催されたもので、「プロジェクト（所内共同）研究」、各課の課題解決を目指す「課内共同研究」、各主事の「個人研究または協力員共同研究」の 3 本で取り組んできたものです。

今回の発表会には、玉城昭子県教育委員長及び伊元正一県教育委員をはじめ、現場の校長、教頭、教職員、各市町村の教育委員会や教育研究所の主事の参加をいただきました。



研究発表全体会風景

プロジェクト研究は「平成 16 年度児童生徒の学習に関する基本調査」で、平成 10 年度に同趣旨で取り組んだ調査研究を基に、この間の教育環境の変化、特に新学習指導要領の施行や学校完全週五日制への移行の中、児童生徒の学習実態がどうなっているかをまとめました。調査対象としては、地区や学校規模、校種等前回の調査を踏まえ、小学 5 年から高校 3 年までの児童生徒及び関係教職員を県内を網羅する形でピックアップしました。調査報告では、不変なこと、明らかに変化し

ていることいろいろある中から、大胆に学校現場へ提言したつもりです。特に「学習意欲と習慣」に関して、「"中だるみ防止"の視点を踏まえた"入り口指導"の充実を」と述べました。

その他、当センターの 6 課（教科、教育経営、理科、IT、特殊、産業）の研究もありました。玉城教育委員長からの質疑や助言等も出るなど、有意義な発表会となりました。

主事による個人研究としては、38 本の研究がありました。それぞれの教科や専門的分野の今日的課題を模索する中、学校現場との連携を目指して現場教諭を研究協力員に委嘱し、協力して研究が進められる形式を取りました。発表は、全ての研究を参観者に触れてもらえるよう、ポスターセッションの形式を取りました。



ポスターセッション風景

各主事の積極的な取り組みと、参観者の熱心な参加によって、盛会裏に発表会を終えることができました。ご参加いただきました先生方、本当にありがとうございました。発表報告書につきましては、後日、当センター Web Page に掲載する予定（3月中旬をめど）です。今回の各報告が、現場での参考資料として有効活用されることを願っています。



## 「学校教育支援室」の改善に向けて

県立総合教育センターでは、平成15年度より学校教育支援室（情報処理教育棟1階）を設置し、先生方、父母・地域の方々に学校教育に関する資料の提供や、授業実践についての支援を行ってきました。

支援室には、学習指導要領・学習指導案、各研究発表大会の資料、教科や各領域に関する文献資料、へき地教育に関する授業実践ビデオやインターネットからの録画ビデオを揃えており、学校教育に関する調査・研究ができます。

また、校内研修の進め方や教材の研究・開発などを進めることもできます。本年度も、各学校の先生方が授業実践についての研修会やグループ研修会を開き、大いに活用されました。

しかし、これまでに、学校の先生方からは、次のような要望や課題があげられました。

各教科や「総合的な学習」等、授業実践に役立つ参考資料が少ない。

「学校教育支援室」の活用方法が各学校に周知されていない。

来所相談したいが学校の仕事が忙しくて平日は行くことができない。

以上のことを踏まえて、今後当支援室の運営方法等を検討し室内の資料の充実を図っていきたいと考えています。



\*研究資料や進路関係、PTA関係の資料の収集については各学校の協力が必要になりますので、依頼があった場合はよろしくお願ひします。

電話やファックス、又はメール等で率直なご意見ご感想をお聞かせください。

### 【連絡先】

電話番号：098-933-7595

FAX：098-933-3233

メール：n-shien@edu-c.open.ed.jp

## 平成16年度より新システム導入 研究室の新たなシステムを紹介します

### 光で距離を測る

今日の技術の進展はめざましく、平成10年に整備された産業教育課の備品は既に時代に取り残されつつある。本課は、高校テクノセンターとして位置づけられ、常に先端技術を追いかける必要性があり、平成16年度から第二次設備整備計画を策定して設備の新規導入を推進している。通信・制御研究室には、電子測量システムが導入された。同システムの大きな特徴は、ノンプリズムトータルステーションと呼ばれる機器で、距離を測定する際に、対象物にレーザー光を照射し、それが返ってくるまでの時間を利用して計測を行うことができる。さらに、水平角方向と垂直方向の回転角も同時に測定できるため、ノート型パソコンと組み合わせることにより、平面図の作成も可能である。この機能は電子平板と呼ば

れ、教育現場で最も注目されている技術であり、今後の活用が期待できる。





# 未来のノーベル賞受賞者を！！

～平成16年度 おもしろ科学教室～

12月5日9時。おもしろ科学教室の準備をしていると、小学校1年生ぐらいの女の子がおじいちゃんに連れられて？おじいちゃんが女の子に連れられて？会場にやってきた。

「受付は9時半からですよ。」

「もう、これが(女の子を指さして)早く行こう、行こうってきかんから・・・。」

「そうですか。じゃあ、受付始まるまでこれをみて、どこから回るか考えてね。」

と、女の子に実施要項を渡す。

9時半。受付が始まる。会場の入り口から中をのぞきこむ子どもたちの声が聞こえる。

「えーっ、ホバークラフトがあるぜ。」

「おれ、スライムからいく！！」

今にも走り出さないか、という感じである。

伊良部島での朝のひとコマ。「理科離れ」なんて言葉は、ここにはないような気がする。

.....

おもしろ科学教室は「自然や身近におこる不思議な現象、疑問に思ったことなどを観察・実験、製作などを通して謎解きをし、科学のおもしろさや楽しさを体験する」ことを目的に、本センターの他に国頭、中頭、島尻、離島の計5箇所



で実施しています。今年度は、本部町、勝連町、具志頭村、伊良部町で実施しました。参加した児童、生徒、保護者の数は約1,200人を超え、毎回、にぎやかな教室となっています。

内容は各担当主事の専門を生かした実験、ものづくりなどで、18コーナーほどあり、参加者がいろいろな体験ができるよう、用意されています。

どの会場でも参加者からは「いろいろなもので、いろんなものがつくれて、みんなで楽しくあそべてよかったなあと感じた。いろいろ体験してとっても楽しかった」「子どもたちにとって夢のある作品が出来る！！と思いました」「家族で楽しいひとときを過ごすことができよかったです」

など、実験やものづくりのおもしろさだけでなく、家族と一緒に科学を体験することの楽しさなども聞かれました。

ボランティアとして協力してくださる先生方、教育委員会の方々、中学生、高校生の数も100人を超え、おもしろ科学教室をより充実したものにしています。

未来のノーベル科学賞受賞者がこのおもしろ科学教室を体験した子どもたちの中から出ることを期待して、充実した『教室』になるよう、次年度も頑張っていきたいと思います。



# ヤンバルの森から

今回はヤンバルの森の生物学的な特性を紹介します。自然度の高さを表す指標の一つに、そこに住む生物の種数、つまり「種の多様度」があります。表1に各生物群の日本全土の種数と沖縄島の種数との比較を示してみました。

**多様な種をはぐくむヤンバルの森：**沖縄島の面積は日本全土の面積の約 0.3 %で、ヤンバルはその三分の一の約 0.1 %にも満たない面積です。しかし表でみてもわかるように最も少ないほ乳類でも日本全土の 12.2 %、アリに至っては 42.3 %もいます。更に固有種の占める割合が高いのも大きな特徴で、カエルの仲間では日本全土で 39 種が生息しますが、沖縄島には 10 種 (25.5 %)、その内ナミエガエル、ホルストガエル、ハナサキガエルは沖縄島北部 (やんばる) のみに、またイシカワガエル、オキナワアオガエルなどは隣接する奄美と沖縄島の固有種です。国土の 22 %を占める北海道 (カエルは 3 種、固有種 1 が生息) と比較すると「種の多様性」の高さがわかります。

**ヤンバルだけの固有種：**カエル以外にもケナガネズミやオキナワトゲネズミ (ほ乳類)、ノグチゲラやヤンバルクイナ (鳥類)、リュウキュウヤマガメ (は虫類)、イボイモリ (両生類)、ヤンバルテナゴガネ (昆虫) と実に多くの固有種が生息しています。これらの種の中には近縁種が遠く中国大陸東部やヒマラヤの山岳地帯にか生息しない種も多く見られ、生物の進化の過程を検証する上でも、東アジアの地史 (成立過程) を知る上でも重要な種が多くふくまれています。そのような意味からも「ヤンバルの森」は世界自然遺産に登録されてもおかしくない貴重な自然の宝庫だといえるのです。

**目に見えぬ危機：**これらの種は殆どがヤンバルの森林溪流を主な生息場所としています。つまり国土の 0.1 %にしかすぎない「ヤンバルの森」がなくなれば、学術的にも貴重なこれらの固有種の大半が地球上から姿を消す (絶滅) 事になります。幸い大規模な森林伐採は一時に比べるとかなり減ってきました。しかし、近年ヤンバルの森ではマングースや野ネコ・野犬などによる「貴重な固有種」たちへの影響が問題になっています。林道開設や下草刈りは森林の乾燥化を引き起こし、マングースの森林への侵入を助長し、心ない飼

主に捨てられたネコや犬は生き延びるために、これらの小動物を餌にします。このままでは森林は残ったが「守るべき貴重な種」は消えてしまったということが起こり得るのです。

表1 日本全土の生物種数と沖縄島の生物種数・割合

生物群	日本全土の種数	沖縄島 (ヤンバル)		
		種数	%	固有種
高等植物	3900	1100	28.0	17
ほ乳類	106	13	12.2	1
鳥類	523	174(38)	33.2	2
カエル	39	10	25.6	3
トンボ	204	47	23.0	3
セミ	37	10	27.0	2
チョウ	237	53	22.4	3
アリ	248	105	42.3	23
面積 (km <sup>2</sup> )	378000	1185	0.3(0.1)	

出典：平良克之・伊藤嘉昭 1997 「沖縄やんばる亜熱帯の森」高文研 より一部改変



図1 ヤンバルクイナ (沖縄島固有種、国指定天然記念物)



図2 リュウキュウヤマガメ (沖縄島固有種、国指定天然記念物)  
(生物研究室 安座間 安史)

# 確かな学力の定着のためのITの効果的な活用

～平成16年度 IT教育センターにおける開発教材の紹介～

ITはハードウェア、ソフトウェアの整備が進み「利活用（ユースウェア）」の時代に突入したと言われます。IT教育センターでは、各教科の授業で活用できる教材の開発を3カ年計画で進めてきました。今年度は、小学校（国語、算数、英語活動）、中学校（国語、英語）、高等学校（国語、英語、家庭、音楽、情報）、養護学校（知的障害）の教材を開発しました。開発した教材はすべてIT教育センターの「教育情報教育システム（<http://www.open.ed.jp/>）」より利用できます。

ここでは、今年度開発した教材の一部を紹介します。

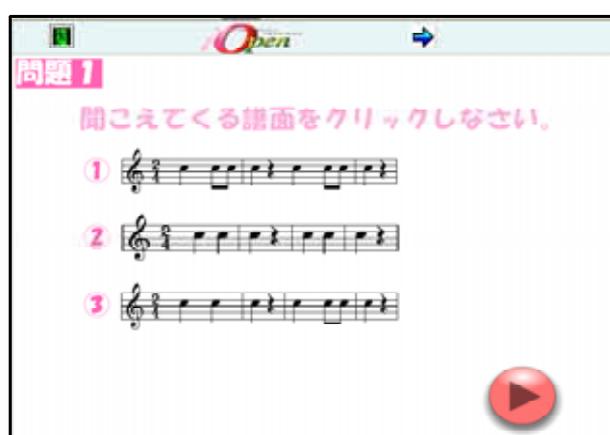
## ～小学校英語活動教材～

小学校で「英語を楽しむ」「意欲を育てる英語活動」が行えるような教材。



## ～音楽(小・中・高共通)リズム問題～

音符の種類や長さを理解し、リズムを読み取る力を育てる教材。



## ～中学校英語 県立高校入試問題～

平成12～16年度の入試問題の学習教材。



## ～高校国語 大学入試センター問題～

大学入試センター試験の2004年度の問題教材。



**【その他の教材】** その他本年度開発した教材として、小学校達成度テスト国語教材、中学校国語古典文学教材、高等学校英語教材、高校家庭科沖縄郷土教材、高等学校教科情報学習教材などがある。

詳しくはIT教育センターの「教育情報共有システム」  
<http://www.open.ed.jp/>でご覧になれます。